



MONGOLIA

学校名：長野県上田高等学校

氏名： 小木曾 一希

〔担当教科：英語・情報〕

● 実践教科等： 情報(2単位)

● 時間数 : 2時間

● 対象生徒 : 高校2年生

● 対象人数 : 320人

1 単元名

「援助」する前に考えよう

2 単元の目標 (ESDの能力・態度)

- ・グローバル化の進む社会の一員として、国境を越えたキャリア観や生徒たち自身と世界とのつながりの深さを認識できるようになる。(つながりを尊重する態度)
- ・他者との話し合いを円滑に行い、意見をまとめられるようになる。(コミュニケーションを行う力、他者と協力する態度)
- ・「援助」というものは多面的な分析を通して、互いの価値観に配慮しつつ、計画性を持って実施しなければならないことを理解する。(未来像を予測して計画を立てる力、多面的、総合的に考える力)
- ・国際協力ということに対して、生徒たち自身がその存在意義について答えを出し、これから先、そのリーダーシップをとり、活動していくことのできる素養を養う。(批判的に考える力、進んで参加する態度)

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・モンゴルと日本の文化や国民性の違いに気づく。【多様性】
- ・発展途上国の教育環境と日本の教育環境の違いに気づく。【多様性】
- ・話し合いを行う中で、他者との価値観、意見の違いに気づく。【多様性】
- ・ワークショップを通して、社会と教育が相互に関連し、影響していることに気づく。【相互性】
- ・国際協力における相互扶助の関係に気づく。【連携性】
- ・話し合いや活動を行う上で、他者と協調することで、よりよい実践ができることに気づく。【連携性】
- ・ワークショップ内で援助計画を立てることで、未来に対する責任を持った、持続可能性に配慮のある計画性を持つ必要性に気づく。【責任性】

4 単元の指導について

(1)教材観

- ・【学校教育目標との関連】本校(平成25年度 SGHアソシエイト校指定)の教育目標の1つとして、「グローバルリーダーの育成」がある。それは、現代社会に対する関心と深い教養に加え、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、将来、国際的に活躍できる人材の育成である。本校では、この教育目標の実現に向け、今年度より、ますます多くの国際的な経験の場を生徒に提供し、自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒を育成することに努めている。このように、国際的な経験の場を増やし、グローバルな視点を養っていく中で、生徒の自主性をより重視するためには、生徒自身が世界との関わり方や他者との協調、他者への援助について、自分自身で導き出した答えを持つことが重要であると考え。本単元は、生徒に、これからの国際的な活動の礎となる「国際化社会の一員である自覚」を持ってもらい、「国際協力の意義」について自身らが自らで答えを導き出すことをねらいとする。国際理解教育を授業という枠組みで扱うのは、本単元が初めてであるので、その導入的役割を果たす位置づけである。
- ・【教科：情報の教育目標との関連】高等学校の学習指導要領が定める教科情報の目標には、「情報機器や情報通信ネットワークなどを適切に活用して情報を収集、処理、表現するとともに効果的にコミュニケーションを行う能力を養い、情報社会に積極的に参画する態度を育てる」とある。本校では、上記の学校教育目標の実現に向け、情報の授業を以下のような体制で行っている。前期(4月～10月)では、2単位(週2時間)の情報の授業を、情報機器や情報通信ネットワークの活用を扱う1単位(週1

時間)と、効果的にコミュニケーションを行う能力(国際的な場でのプレゼンテーションを想定)を扱う1単位(週1時間)で行い、後期では、前期で得た知識を使って、生徒それぞれが設定した課題について探究し、その成果を英語でプレゼンテーションする(図1参照)。本単元は、前期の情報の授業で、特に、効果的にコミュニケーションを行う能力を扱う1単位(週1時間)で実施される。ワークショップでの話し合いを通して、問題に対して自分自身の意見を持つこと、自分の意見を発表すること、他者の意見を聴くこと、他者との話し合いでよりよい問題解決を考えること、を経験し、効果的なコミュニケーションについて理解を深めることがねらいである。

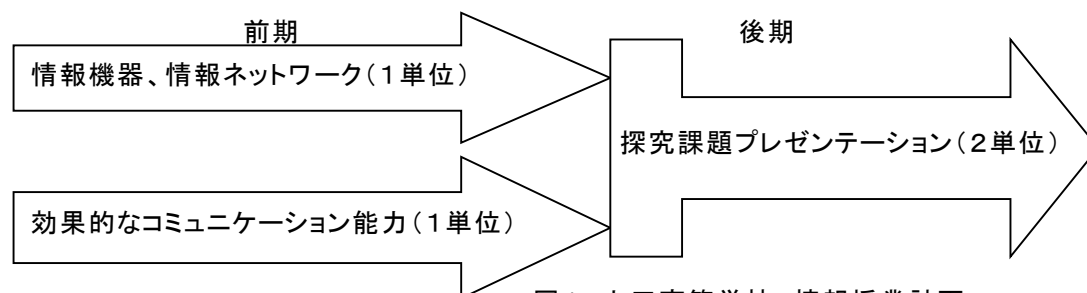


図1 上田高等学校 情報授業計画

(2)児童生徒観

- ・知識に富み、意欲に溢れている生徒が多く、将来的には、国際的なフィールドでリーダーとして活躍することが期待される。しかし、受動的に知識を得ることはできるが、自ら積極的に意見を考えたり、発表したりすることは苦手とする生徒もいる。
- ・国際的な視野や興味を持つ生徒も多いが、表面上の知識にとどまっている傾向にあり、具体的な世界とのつながり方や世界の現状を知る機会は少ない。
- ・対象学年320名の中に、本年度の夏季休業中に、海外研修として、フィリピンで発展途上国の現状を学んできた生徒たちがいる(約20名)。発展途上国の現状を実際に見て、問題意識を高め、さらに意欲的に国際的な活動に取り組んできている。

(3)指導観

- ・本単元は、ワークショップでの話し合いを中心に行うが、自ら意見を考え、発表することを苦手とする生徒もいるので、意見発表までのプロセスを明確な指示を与え、細かく段階を設定したり、発表の規模を徐々に広げたりするなどして、活動に参加しやすくする。
- ・本単元で行うワークショップでは、実際に国際的な支援を行う立場になったと想定し、その意義や問題点、計画性について話し合いを行っていく。この活動を通して、生徒の国際的な視野や興味を、実際の活動へとつなげるようにする。
- ・海外経験を積み、国際的な活動に対する知識を得て、その活動への意識を高めている生徒がいるので、本単元の活動においても、先導的な役割を果たし、他の生徒への良い刺激となって、全体の意識向上へとつながることを期待する。

5 評価基準

観点	効果的にコミュニケーションを行う能力	主体的に意見を考え、発表する意欲・態度	他者と協力する意欲・態度	国際協力に関する知識・理解
評価規準	話し合いの際に、相手に自分の意見が伝わるように話すことができる。また、他者の意見を理解し、話し合いを建設的に進めることができる。	自らの意見を言葉にでき、グループ内、または、クラス内で発表することができる。	積極的に話し合いに参加し、自らの意見と他者の意見を考慮して、問題解決に臨むことができる。	国際協力として、援助を行う際に、注意すべき価値観の違いや持続可能な計画性について知り、実際に計画を立てることができる。
評価方法	ワークシート 話し合いの様子 意見発表	ワークシート 話し合いの様子 意見発表	ワークシート 話し合いの様子	ワークシート 話し合いの様子 意見発表

6 単元の構成

※太枠の授業内容詳細を「7 授業事例の紹介」に記載

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	① 国際協力の現場を知る。 ② ワークショップ「バーン村にて」	・国際化社会におけるキャリア観に触れる。 ・国際協力の実態を知る。 ・「持続可能(な援助)」という言葉の導入。 ・国際援助の活動を行う際の問題点や注意点について理解する。 ・話し合いを通して、他者との協働、効果的なコミュニケーション能力について学ぶ。	【ビデオ教材「隊員たちの声」視聴】 青年海外協力隊隊員のインタビュービデオ 1. 吉田量子隊員(幼児教育) 2. 池田佳史隊員(バスケットボール) 制作: 教師海外研修モンゴルコースチーム ・国際協力の現場で実際に働く青年海外協力隊隊員のキャリア観や援助活動を通しての苦労や喜びを知る。 【ワークショップ「一枚の看板」】 『「援助」する前に考えよう-参加型学習とPLAがわかる本-』(開発教育協会)より ・「寄付」という国際援助を取り上げ、その運用の注意点や改善策をグループに分かれて話し合う。
2	① ワークショップ「再びバーン村へ」	・援助における重要な要素である「持続可能性」についての理解を深める。 ・他者の立場に立ち、異文化や異なる価値観を受容する態度を養う。	【ワークショップ「再びバーン村へ」】 『「援助」する前に考えよう-参加型学習とPLAがわかる本-』(開発教育協会)より ・国際援助の計画を、援助側、被援助側、コーディネーターなどのロールプレイで練っていく。

7 授業事例の紹介

小単元名【 ①国際協力の現場を知る ②ワークショップ「バーン村にて」 】

(1) 指導案

(ア)実施日時 平成26年8月22日(金)第6限(14:50~15:45)

(イ)実施会場 131教室

(ウ)本時の目標

- ・青年海外協力隊隊員のインタビュービデオを見ることで、国際協力に携わる人のキャリア観、国際協力活動を行う上での苦労や喜び、異文化について知る。
- ・ワークショップ「バーン村にて」を通して、国際援助を行う際の問題点や注意点を生徒たち自身で見つけ出し、共有する。
- ・ワークショップ「バーン村にて」を通して、答えの決まっていない問いに対して、主体的に考え、自分の意見を発表できるようになる。
- ・ワークショップ「バーン村にて」を通して、他者との話し合いを行い、集団内で意見をまとめ、よりよい問題解決を提案できるようになる。
- ・本授業を通して、国際社会を生きる一員として、自分と世界の関わり方や国際協力の必要性、国際協力の意義について、生徒一人ひとりがそれぞれの答えを手に入れる。

(エ)指導のポイント

- ・国際理解や国際協力について授業で扱うことは初めてであるので、実際に国際協力の現場で働く青年海外協力隊隊員のインタビュービデオを見せることで、生徒たちの興味、関心を引き、円滑な導入を目指す。
- ・青年海外協力隊隊員のインタビュービデオの中で、「今の支援活動は持続可能だと思いますか。」や「現地のニーズと合っていると思いますか。」という質問がある。これらは、以後のワークショップ内で生徒たちが考えるべき観点と結びついており、ビデオ教材とワークショップが関連性を持っている。
- ・教員はできる限り、自分の意見や価値観を述べることは避け、ファシリテーターとしての役割に徹する。これにより、生徒の自由な発想を促し、意見を考えやすく、また、発表しやすくする。(実際は、最終的なフィードバックにて、ロールモデルという観点から、自らの意見や価値観も提示した。)

(オ) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 20分	ワークシートを配付		ビデオ	機材を準備しておく。	
	【インタビュービデオ】 「隊員たちの声」① 吉田量子隊員(幼児教育)を流す。	メモをとりながら、インタビュービデオを見る。		青年海外協力隊の概要や吉田隊員の紹介を簡単に行い、ビデオ教材の理解を促す。	ワークシート
	【インタビュービデオ】 「隊員たちの声」① 池田佳史隊員(バスケットボール指導)を流す。	メモをとりながら、インタビュービデオを見る。	ビデオ	池田隊員の紹介を簡単に行い、ビデオ教材の理解を促す。	ワークシート
展開 30分	【ワークショップ】 「バーン村にて」 ・グループワークの指示を出す。	・4人組になり、グループで机を合わせ、話し合える形式をとる。 ・場面の説明を聞き、Q1に対する自分の意見をまとめる。	グループ	・個人の意見はワークシートへ記録させる。	ワークシート
	・場面の説明とQ1の問いかけを行う。 Q1「いくら寄付するか。」 ・話し合いの指示を出す。	・グループで意見交換をし、発表者を決める。		・グループ内や他グループの意見もワークシートに記入させる。	ワークシート
	・グループごとに指名し、意見を発表させる。	・グループごとに意見を発表し、クラス全体で共有する。	発表	・発表された意見は、黒板に板書でまとめ、共有を促す。	意見発表
	【ワークショップ】 「バーン村にて」 ・Q2の問いかけを行う。 Q2「その援助活動に賛成か反対か。」 ・話し合いの指示を出す。	・Q2に対する自分の意見をまとめる。	グループ	・個人の意見はワークシートへ記録させる。	ワークシート
	・グループで意見交換をし、発表者を決める。	・グループで意見交換をし、発表者を決める。		・グループ内や他グループの意見もワークシートに記入させる。	ワークシート
	・グループごとに指名し、意見を発表させる。	・グループごとに意見を発表し、クラス全体で共有する。	発表	・発表された意見は、黒板に板書でまとめ、共有を促す。	意見発表
	【ワークショップ】 「バーン村にて」 ・Q3の問いかけを行う。 Q3「その援助活動の改善点は何。」 ・話し合いの指示を出す。	・Q3に対する自分の意見をまとめる。	グループ	・個人の意見はワークシートへ記録させる。	ワークシート
	・グループで意見交換をし、発表者を決める。	・グループで意見交換をし、発表者を決める。		・グループ内や他グループの意見もワークシートに記入させる。	ワークシート
	・グループごとに指名し、意見を発表させる。	・グループごとに意見を発表し、クラス全体で共有する。	発表	・発表された意見は、黒板に板書でまとめ、共有を促す。	意見発表
まとめ 5分	【フィードバック】 ・本時のキーワードを考えさせて、感想とともに記入させる。	・本時のキーワードと感想を記入する。	ワークシート	・キーワードは端的にまとめさせ、印象に残るようにする。	ワークシート

(2) 授業の振り返り

【国際協力の現場を知る】

段階		項目
P	計画	・生徒の国際理解や国際協力への興味、関心をかき立てる。(ねらい) ・グローバルなキャリア観や国際協力の現場について知る。(ねらい) ・「気づき」をワークシートに記入させることで、考えの内在化を図る。(工夫)
D	実施	・生徒たちに聴かせたい内容を項目立てして、青年海外協力隊隊員にインタビューをし、教材として編集した。(準備) ・国際協力と青年海外協力隊について、その概要を簡単に説明した。(授業) ・青年海外協力隊隊員のインタビュービデオを見せ、ワークシートへ「気づき」の記入を指示した。(授業) ・生徒に授業の振り返りを行わせた。(授業)
C	検証	・多くの生徒が国際協力を身近に感じるとともに、一部の生徒が主体的に活動始める意欲を持つようになった。(学習成果) ・多くの生徒が言語学習の大切さを再認識した。(学習成果) ・インタビュービデオを視聴する前に、取り上げられている青年海外協力隊隊員についての説明が不十分であった。(問題点)
A	改善	・インタビュービデオを視聴する際の事前情報として、登場する青年海外協力隊隊員の基礎情報、活動内容などは、ワークシートに記載しておく。(改善点)

【ワークショップ「バーン村にて」】

段階		項目
P	計画	・主体的に考え、自分の意見を発表する機会を与える。(ねらい) ・他者と話し合いを行い、集団内で意見をまとめる経験をさせる。(ねらい) ・国際協力の必要性やその意義について考えるきっかけを与える。(ねらい) ・活動を細かく段階分けし、明確な指示を与えることで、活動を円滑に進め、ねらいの達成を試みる。(工夫)
D	実施	・国際協力における問題点や注意点を見出せる、参加型学習教材を用いる。(準備) ・寄付という援助活動をテーマに、その活動の意義や注意点、改善点について、グループを構成し話し合いを行った。(授業) ・生徒に授業の振り返りを行わせた。(授業)
C	検証	・身近で、何気なく行っていた寄付や募金といった活動のもつ、問題点や注意点に気づき、その運用の難しさに気付けた。(学習成果) ・多様な価値観に触れ、それらを受容する態度が見られた。(学習成果) ・活動が授業時間内に終了しなかった。(問題点)
A	改善	・さらに10分の時間をこの活動に配分する。(改善点)

【単元全体を通して】

段階		項目
P	計画	・2つの教材(小単元)が相互に作用し、生徒の国際理解や国際協力に対する興味、関心、意欲を高める。(ねらい)
D	実施	・国際協力活動に焦点を当て、身近な題材で取り組める教材を使用する。(準備) ・インタビュービデオ内で、「持続可能性」という言葉を意識的に用いる。(準備) ・ワークショップ内で、「持続可能性」を検証するように指示を出した。(授業) ・生徒に授業の振り返りを行わせた。(授業)
C	検証	・ほとんどの生徒が、「持続可能性」が重要であることを認識した。(学習成果) ・ほとんどの生徒が、国際協力の必要性や意義を見出した。(学習成果) ・ワークショップのタイという設定が適切であったかを検討する。(検討課題) ・活動が授業時間内に終了しなかった。(問題点)
A	改善	・インタビュービデオの視聴を一つに削減し、ワークショップにさらに10分の時間を配分する。(改善点)

(3) 使用教材

①ビデオ教材「隊員たちの声」

教師海外研修モンゴルコースチームが、モンゴル派遣中に青年海外協力隊隊員にインタビューを行い、帰国後、教材として編集した。

1. 吉田量子隊員（幼児教育）
2. 池田佳史隊員（バスケットボール指導）

②ワークショップ「バーン村にて」

教師海外研修の事前研修にて行われた「一枚の看板」（『「援助」する前に考えよう』ワークショップ）の資料を、一部授業に合わせて変更を加えた。

配付した教材は、ワークシート（右図参照）と振り返りシートである。

(4) 参考資料等

『「援助」する前に考えよう-参加型開発とPLAがわかる本-』田中治彦、開発教育協会、2006年

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

生徒の感想より

- ・今回、グループでいろいろ話し合ってみて、本当に何が必要なのか、結論を出すのが難しいと思った。それでも、物資の支援ではなく、技術の支援を行えば、村がより良く、持続可能になっていくのではないかと思った。
- ・支援をするというのは、やはり簡単なことばかりではないと思いました。他国を支援する時には、気をつけることがたくさんあることを知ったので、これから活かしていきたいです。
- ・必要なものと支援できるものを互いに伝え合うのが、思ったより難しかった。みんなで話し合っ、考えを伝え合うのは、支援をするには必ず必要であると思った。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

各活動については、7(2)を参照。

【生徒の変容】

国際理解や国際協力に興味、関心を持つようになった生徒が多かった。加えて、「私には、今、何ができるか」ということを自らに問いかける生徒もおり、国際的な活動への意欲が湧いていることが確認できた。話し合いを通して、多様な価値観に触れ、それを受容する態度も培われた。

【課題と改善点】

- ・ワークショップの話し合いの時間配分は、不足傾向にあった。あまり長い時間を与えても、話し合いの効率を下げることになるので、事前にシミュレーションを行い、かつ、余裕のある時間配分を心掛ける。
- ・ワークショップ「バーン村にて」と「再びバーン村へ」を生徒の実態や他教材との関連性という観点で、作り直す必要がある。具体的に言えば、ビデオ教材がモンゴルをフィールドにしているので、ワークショップもモンゴルをフィールドにして作り変える。ワークショップの場面やロールプレイの状況がイメージしやすいように、詳細な情報を組み込む。（教師海外研修で得た情報や資料を参考とする。）

10 教師海外研修に参加して

国際協力について、その意義を明確化できた研修であった。研修に行く前は、国際協力は必要であると感じながら、生徒にその意義を伝える手段や言葉が思いつかずいた。しかし、今回の研修を通して、その意義を見出しつつ、国際協力や異文化理解について、いまだ悩んでいる青年海外協力隊隊員や教員がいることも知った。生徒たちにとっては、問題発見をし、自分たち自身で考え、悩み、答えを見つけ出ししていく機会を持つことが必要であるとわかった。

最後に、この研修で得られたかけがえのない繋がり、そして、それを与えてくれた関連機関、担当者に深く感謝を表したい。

後期での課題研究・発表に向けて

世界の現状について考える — 「他国への支援」の観点から考えてみよう

1) JICA隊員へのインタビュー「隊員たちの声」から学ぼう

1人目：.....さん
活動内容や考えていることなど/印象に残ったことばなど

2人目：.....さん
活動内容や考えていることなど/印象に残ったことばなど

2) グループでのワークショップ — 「他国への支援」について考える

☆ワークショップの前提

あなたはタイのある村を旅行で訪れています。
そして村の道で下のような看板を見つけました。



↓ タイと周辺の地図